
M大写真部副部長の喧騒

柏木杏花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M大写真部副部長の喧騒

【Nコード】

N0777Z

【作者名】

柏木杏花

【あらすじ】

M大写真部。ここは個性が強すぎる後輩が、むやみやたらと集まってくるサークルだ。絶世の美女にしか見えない一年男子とその彼女。その彼女の辛辣な女友達。ブログの女王に、鉄道マニアの撮り鉄。こんな写真部の副部長を、なぜか平凡きわまりない俺がつとめている。いろいろあるけど、それなりに平和にやってきた。だがある日、俺に許嫁が湧いて出た。しかもその許嫁が小学生つてなんぞなんだ！俺は自慢じゃないけど十歳年下より、十歳年上の方がいいんだよ。こういう価値観って十年後も二十年後も、変わらない

と思ってるのに！ イマドキの草食男子、松浦惣介のだいたいドタ
コメ。ちよつとラブコメ。軽くて楽しい話がお好みの方は、お試し
ください。

第一話

突然の婚約話

「惣介、ちよつと惣介」

「はあ？ なに？」

その日、土曜日の午後だというのに、珍しく家でゴロゴロしてたのが悪かったのか、晩ごはんを作ってるお袋にからまれた。

俺は松浦惣介。^{まつうらそうすけ}M大経済学部三年、写真部副部長。他に特筆すべき事柄は、あいにく持ち合わせていない。

自分で言うのも虚しいが、どこにでもいる普通の大学生だ。

「いい若者がだらだらと鬱陶しいわね。あんた、つきあってる彼女とか、いないの？」

「いないよ」

リビングのソファアに寝そべり、雑誌に目を落としたまま、俺は生返事だ。彼女がいたら、土曜に家でゴロゴロしてるわけがない。

平和だ。平穏だ。平凡だ。

子どもの頃から住み慣れた住宅街の一戸建て。夕飯の準備にいそしむ母親から多少からまれたとしても、どつてことはない。

この日はM大の学祭が終わって最初の土曜日だ。副部長という名ばかりの肩書のせいで、写真展ではメインで働いてきたから、家でこんなのにんびりするのも久しぶりだった。

もっとも今夜は写真部の打ち上げコンパだから、夕方には出かけるのだが。

「情けないわね。せっかくひとが、そこそこイケメンに産んであげたつてのに、覇気がないつたら……」

「覇気がないのは、まあ認める。万事無難つてのは、俺の個性なんだよな。無難が個性つてのはちょっと変か。」

「だいたい、イケメンにそこそこつて付けてる時点で、産んだ本人も息子を平均点だと評価してるつてことだ。親の欲目つてのはないのかな。」

「まあでも、ちょうどいいわ」

「なにが？」

「実はあんた、許嫁がいるのよ」

「はあ~~~~~?」

平凡な俺の、平凡な人生は、こんなひと言で転がり始めた。

許嫁……?」

許嫁つて、もしかして、もしかしなくても、婚約者みたいなもんだよな? みたいというより、そのものなんだろうけど、いきなり許嫁の存在を突きつけられた男なんて、この程度は取り乱すだろう。それにしたつて、この平成のご時世に、結婚相手を親が決めるなんて、一般庶民があり得るの? あり得ないよなあ。

「母さん、それ、なんの冗談?」

手に持っていた雑誌をテーブルの上に放り出して、俺は座り直した。対面式のシンクで料理の下ごしらえの手を休めることなく、お袋は平静を保っている。

「冗談なんかじゃないわよ。どうせあんたのことだから、だれが相手でもたいして変わらないでしょう。ならいいじゃない」

「違うないわけないだろ。なに言ってるんだよ。だいたい、俺まだ大学生なんだから、結婚なんてあり得ないし……」

「だれがいますぐ結婚しろなんて言ったのよ。婚約よ」

そんなに違わないだろ。いますぐか、あとかの違いじゃないか。

「とにかく、相手くらい自分で探すから、許嫁とか完全に却下だからね」

「ものすごく可愛い子なのよ。気にならない？」

「ならない」

「ほら、それよ」

それって、なんだよ。勝ち誇ったみたいに、ふんぞり返って。

「普通、年頃の男子大学生が、許嫁がいて、その子が可愛いって訊けば、どんな子が気になるはずじゃない。それが間髪入れずに気にならないって言い切るのは、おかしいわよ。異常よ。非常識よ」

「非常識なのは母さんだろ。だいたい、万が一『気になる』とか言

「つたら、一気になだれ込んで結納の日取りは……とか決めかねないじゃないか」

「そんなトラップに引っかかるほど、俺も伊達に二十一年間、お袋の息子をしてはいないんだ。」

「……まさか惣介、あんたホモか不能じゃないでしょうね」

「言うに事欠いて、なんて推測をしゃがるかな、このおかんは。」

「で、どっちなの？ 白状しなさい」

「ちょっと待て。なんで二者択一なんだよ。」

「どっちも違います！」

「いい加減、怒鳴りたくなってきたが、あいにくチャイムが鳴ったので、俺は気を削がれた。」

「惣介、出てよ。いま手が離せないわ」

「今夜のおかずはハンバーグか餃子なんだろうな。お袋の手が、ひき肉の油でテカテカに光っていた。」

第一話

突然の婚約話（後書き）

はじめまして。お読みいただいて、ありがとうございます。

もう少し煮詰めてから投稿したかったのですが、結局、見切り発車です。

できるだけ、2、3日以内に更新していきたいのですが、途中で止まるかも（<|>、）

4日以上間が空くときは、活動報告でお知らせします。

久しぶりのコメディイですけど、読んだ人がコメディイのジャンルに入れてくださるのか、妙に不安な船出です。

お気づきのことなどありましたら、教えていただけると嬉しいです。明日も更新予定です。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！

俺は頭を掻きながら、不承不承、玄関に向かった。扶養家族の分際は盛大に辛い。ドアを開けると、待っていたのは斜め向かいに住む女の子だった。

学年は確か、小学五年生だったよな。いまどき、ませた子も多い中で、小柄でおさげなもんだから、年より幼く見える。

「凜ちゃん、どうしたの？」

「雄介くんいる？」

雄介は俺の弟だ。二歳年下で、四月からF大に通っている。大学生に小学生が『くん』づけで呼んだりするんだが、凜は俺にも『惣介くん』だ。これは、凜の親が俺ら兄弟をそう呼ぶからである。小さい子どもは、親の呼び方をそのまま真似するからな。

呼び方が変わるの、中学に行って、部活とかしてからなんだろうなあと、俺は思ってる。べつにいまの呼び名も嫌じゃないし、構わないんだけど。

生まれたときから知ってるし、家族の延長みたいな存在だ。

「いま、バイトに行ってるよ」

「そっかあ。残念」

「どっかしたの？」

「算数の宿題、わかんないところあるから、教えてもらいたかったの」

そういえば雄介が、ときどき、凜の勉強みてるって言ってたな。

「俺でよかったら、みてあげようか？」

「いいの？」

「いいよ。どっ？」

教科書が出てくるのかと思えば、凜が手にしているのは小学五年生のドリルだった。なんとも懐かしい代物だ。裏返すと『しょう野りん』と小学生らしい文字で名前が書かれてある。まだ習っていない漢字はひらがなだから、庄野凜とは書けないらしい。

わからないという問題を指差されて、俺は唖った。時間と距離の応用問題だ。これは確かにちよつとややこしい。少なくとも、紙に図を書いてあげないと、わかるようには説明できない。

こんな玄関先で机なんかあるわけないし、やっかいだな。そんなことで思案していると、お袋がエプロンで手を拭きながら出てきた。

「惣介、どなただったの……あら、凜ちゃん。ああ、宿題しに来たのね。あいにく雄介は留守だけど、惣介でもどうにかなると思うし、上がって教えてもらいなさい」

「母さん、F大よりM大の方が偏差値、上なんだけど……」

「自分で問題を解くのと、ひとに教えるのは別よ。あんたは苦労もせずに理解しちゃうから、わからない気持ちかわからないのよ」

さすが母親。案外、鋭い。実際俺は、理解が早いと言われている。苦手な教科もないが、得意な教科もない。

雄介は苦勞して理解する奴だから、一度身に着けた知識は大事に

するし、好き嫌いもはっきりしている。小学生に勉強を教えるのは、雄介みたいな奴の方が、向いてるのかもな。

わざとらしく肩をすぼめて見せてから、リビングに行こうとして、お袋に腕を掴まれた。

「四時から韓流ドラマがあるの。全力で見ないと命にかかわるから、自分の部屋で教えてあげてね」

それでこんな早い時間から、ひき肉をこねくり回していたのか。

「間違い起こしちゃ駄目よ」

相手は小学生だぞ。どんな間違いがあるって言うんだ。

「惣介くん、間違いってなに？ 算数？」

「……間違いなんか全然ないから、大丈夫だよ」

凜の頭をなでながら、俺は溜め息をついた。

凜は俺の部屋に入ると、もの珍しそうにキョロキョロした。そういえば、俺の部屋に入るのは初めてなんだ。親同士が懇意にしても、それぞれの子どもは年も離れているし、それが普通だろうけどな。

「写真がいっぱい」

壁のボードにはぎゅっちり写真が貼り付けてるし、机や本棚の空い

てる場所にはフレームに収まっている写真が所狭しと置いてあるから、写真まみれに見えるんだろう。これでも飾ってあるのは、ほんの一部なんだが。

「写真部だからね」

中学からさほど変わり映えがしない部屋は、ベッドと勉強机、あとは壁の本棚しかない。

納戸からコタツ机と座布団を持ってきてもいいんだが、どうせ宿題も二、三問教えればいいだけだろうし、面倒だ。俺は凜を勉強机に座らせて、雄介の部屋から椅子だけ持ってきた。隣に腰かけると、凜が愉しそうに笑った。

「家庭教師のコマーシャルみたい」

言われてみればそうだな。

「雄介に教えてもらおうときは違うの？」

「雄介くんは一階で教えてくれるよ」

そうだよな。そんなに頻繁でもないみたいだし、今日だってこんな問題じゃなきゃ玄関先だってかまわなかった。

凜がわからなかった問題は、だれでも躓く問題だ。1時間70分は130分。1.8キロメートルは1800メートル、と考えなければ解答できない。けれど、130分は何時間何分ですか？ という問題に慣れているから、分に戻す発想になれないんだろう。

凜は最初こそ首を傾げていたが、途中で「あ、そっか、わかった」と声を弾ませた。

理解力が高い方ではないが、集中力はあるみたいで助かった。

他の問題も同じ応用で解けるものだったから、宿題は案外あっさり、終わらせることができた。

「惣介くん、ありがとう」

「どういたしまして」

持ってきた荷物を手提げ鞆に詰めると、凜は机の上のフォトフレーム手に取って呟いた。

「このお姉さん、すごく綺麗」

「ああ、そうだね」

俺は頷いた。綺麗なのは間違いない。ただ、お姉さんではなくて、お兄さんだけど、小学生に説明するのも面倒なので細かい情報はスルーだ。

「惣介くんが撮ったの？」

「そうだよ。大学の後輩なんだ」

「へー、大学の女のひとって、みんなこんなに綺麗なの？　なんかアイドルみたい」

「その子はちょっと、特別だよ」

この写真は久しぶりに納得できるものだったから、自分でも気に入っている。一番、目につく場所に置いておきたいくらいには。

「凜ちゃん、おばさんまだ帰ってないの？」

「うん。今日は夜勤なんだって」

慣れていいのか、寂しさを表情に出さないのが、かえって痛々しい。一人っ子だから、家に帰っても誰もいないんだよな。

凜の母親は看護師で、夜、帰れない日もあるらしい。いや、今日は土曜日だ。親父さんはいないのかな。

「俺はこれから打ち上……」

打ち上げコンパと言いかけて口を噤んだ。小学生にはわかりにくい言葉だと思い、言い直す。

「えっと……飲み会に行くけど、しばらく下にいる？ お袋と韓流ドラマ観なきゃいけないけど」

「うっん、帰る」

一人で待つのは慣れてるのかな。そもそも一人でいるのが寂しいのか、羽を伸ばせて愉しいのかもわからないんだよ。俺だってかつては小学五年生だった時期があったはずんだけど、なにが出来て、なにが出来ないのか、さっぱり思い出せない。

俺の場合、これくらいのときは、ほとんどお袋が家にいたし、雄介もうるさくまとわりついてたからなあ。

「お父さんがもうすぐ帰ってくるから」

「そっか」

「飲み会ってなんか、お父さんみたい」

小学生からしたら、俺らのすることなんか父親と変わらないんだろうか。実際、来年就活が本格化して、うまく内定をもらえば、再来年は社会人だ。

やることなすこと、父親世代と同じになる。そうになると、お袋が言った婚約者も現実味を帯びて迫ってくるのかな。

俺はうんざりした気分で溜め息をついた。

「どうしたの？」

「ああ、いや、さっきうちのお袋が、許嫁がどうのこうのって言うてたんだ。まあ、冗談なんだろうけどね」

小学生相手に、なにを愚痴こぼしてんだろ、俺は。

「許嫁の話、まだ訊いてなかったの？」

「？ 凜ちゃん、なんで知ってたんの？」

「なんでって、惣介くんの許嫁、あたしだから……」

お袋が言ってた、ものすごく可愛い許嫁って……凜……？

そりゃ、可愛いだろう。小学生なら、たいていは。

俺がその場で卒倒しかけたことは、言うまでもない。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777z/>

M大写真部副部長の喧騒

2011年12月3日21時46分発行